第７回登別市総合計画第３期基本計画市民検討委員会育み部会議事録

◆開催日時　　平成２６年９月１９日（金）　１７：３０～１９：００
◆開催場所　　第２委員会室
◆出席部会員　部会長　安宅　錦也
　　部会員　仲川　弘誓
　　合田　美津子
　　佐藤　文子
　　磯田　大治
　　佐藤　史彦（庁内検討委員会　部会長）
　　【教育部次長】
　　千葉　浩樹（庁内検討委員会　副部会長）
　　【教育部社会教育Ｇ総括主幹】
◆欠席部会員　副部会長　川村　正勝
◆事務局　　上野総務部企画調整Ｇ企画主幹
　　西川原総務部企画調整Ｇ主査
◆議題　　「第５章　豊かな個性と人間性を育むまち」について

〈部会長〉
それでは、第７回育み部会を始めたいと思います。
今日は、Ⅱ「地域に根ざした魅力ある学校づくり」からとなりますので、まず１の「特色ある学校づくり」について何かご意見ありますか。

〈部会員〉
これまでの登別市の特色というのはどのようなものだったのですか。

〈部会長〉
学校の地域性であるとか地域の中での人材などをうまく活用して、例えば地域交流プラザでは、コーディネーターの方にご協力をいただきながら、栽培活動などについて取り組んできました。
この地域交流プラザが学校支援地域本部事業の中で発展的に繋がっており、さらにコミュニティスクールへと発展をしてそれぞれの地域の特色を活かしながら、学校、地域、家庭が一体となって学校づくりをしていこうという取り組みを行っています。
全道的にも登別は先進的な取り組みを行っているまちだと思います。

〈部会員〉
入浴体験も実施しているのですよね。

〈部会長〉
入浴体験の他にも、今年で３年目となりますが小学生のスキー学習も実施しています。
以前は登別小でのみ行っていましたが、地元のスキー場を活用してウインタースポーツに慣れ親しむという意味もありまして、今では市内全域に拡大し実施しています。

〈部会員〉
入浴体験は何年生で実施しているのですか。あと、ふるさと農園は全校で実施しているのですか。

〈部会長〉
３年生です。ふるさと農園は全校ではありませんが実施している学校は１～２年生で行っています。学校農園でじゃがいもや枝豆などを栽培し、子どもたちで収穫して皆でいただいています。

〈部会員〉
放課後の取り組みも何か行っていますよね。

〈市庁内部会副部会長〉
学校教育ではなく社会教育の部分となりますが、鷲別小と幌別東小に放課後子ども教室を開設しています。

〈部会員〉
学校教育と社会教育の区分が私たちには難しいですね。
授業中は学校教育で、放課後だと社会教育という感じでしょうか。

〈部会長〉
そういうことです。
子どもたちの放課後の居場所づくりという意味合いのほか、学校児童館的な役割も持っています。

〈部会員〉
子どもたちの学習指導もしていますよね。あれは何という名称ですか。

〈部会長〉
　仮称ですが、放課後学習塾といいまして、地域のボランティアの方にご協力いただいて月に１～２回程度行っており、子どもたちの基礎・基本の補充を図るということを目的に実施しています。
　９月から若草小学校がスタートし、富岸小と登別小が１０月からスタートする予定でいま準備を進めています。
　ゆくゆくは全小学校に拡大して、地域のボランティアと共に子どもたちの基礎・基本の充実が図られるよう、コミュニティスクールの一環として展開できればと考えております。

〈部会員〉
　登別の学力が低いと聞いていますがどのくらいですか。

〈部会員〉
　でも、今年は結構上がったと聞いていますが。

〈部会長〉
　学校間の格差も縮小してきましたし、中学校は全道平均を上回っていますし、今年についてはいい結果だったのではないかと思っています。
　小学校の方も改善が見られておりますし、学校によっては全道平均を超えているところもあります。

〈部会員〉
　秋田県の結果が良いのは何か理由があるのでしょうか。

〈部会長〉
　祖父母が身近にいて、放課後も学習面の面倒を見てもらえるという環境があることも一因かもしれませんね。

〈部会員〉
　やはり３世代同居の影響が強く出ているんでしょうか。
　いい意味で、古いコミュニティの良さというものが生かされているのではないかと思います。

〈部会員〉
　今年は上がりましたが、このベースの部分をいかにして維持していくのかが今後の課題だと思います。

〈部会員〉
他のまちの小中学生と比べて塾に通っている割合はどうですか。

〈部会長〉
札幌市以外のまちは同じような比率だと思います。

〈部会員〉
地域全体の問題としてどう取り組んでいくのか、ということを考えることが必要で、学校や塾など教育に関わる人たちと地域の人たちの意識が大切だと思います。
いずれにせよ、学力を上げていく取り組みが必要なのは間違いないと思います。

〈部会員〉
今年、全国学力テストの成績が上がった原因は何ですか。

〈部会長〉
これまで取り組んできたことの積み上げだと思います。

〈部会員〉
先生の質がよかったのでしょうか。

〈部会長〉
それは教え方の部分が大きいと思います。
道教委から出されている、ワークシートやドリルシートを中心に昨年は取り組んできましたので、その成果が少しずつ出てきたのかなと思っています。
それから、「確かな学力の向上」の前に「子どもたちの生きる力を育む」という項目がありますが、現場ではこのような取り組みが少しずつ進んでいると感じています。さらに、プラスアルファとして「特色ある教育活動の推進」や「開かれた学校づくりの推進」ということで、地域や家庭との連携を深めることが、さらに子どもたちの成長に繋がっていくのではないかと私は考えています。
いくつか施策が出ていますが、「時代の変化に伴う教育課題への対応」という部分において、思考力、判断力、表現力という知識基盤社会で、子どもたちが身に付けなければならない力をどのように養っていくか、ということが課題になってくると思います。
外国語教育においては、これから教科化されていくことになりますが、登別市には、現在４名のＡＬＴがおり、小学校に２名、中学校に２名がそれぞれ配置されておりますので、この部分では手厚く対応していただいていると思います。
将来的には、小学３年生まで拡げるような配置となれば、特色ある教育にも繋がっ

ていくのではないかと思います。
　明日中等教育学校もありますので、明日が行っている特色ある学校づくりの部分との繋がりも作っていければと思っています。

〈部会員〉
　明日はそういう教育を期待されている学校なので、ＰＲもしているのだと思いますが、他の学校はそうはいかないので、ますます差が広がってしまうのではないかと危惧しています。

〈部会長〉
　明日は道立ですからその部分での違いはあると思います。
　国際理解に重点を置いた教育を行っていますし、カリキュラムも６年間のうち、前期、中期、後記に分けて、中学校では３年のところ２年で国際理解を履修しています。中学３年と高校１年ではさらに進み、すべて英語で会話する授業があるなど学校の特色を活かした教育を行っています。
　来年は、札幌に開成中等教育学校ができるので、そちらに流れることも予想されます。

〈部会員〉
　道は、他にもまだ中等教育学校を造る計画があるようですね。

〈部会長〉
　道南、道東などのエリアに分けて造るのではないかと思いますが、そういう意味では、ここ登別は恵まれた環境にあると思います。

〈部会長〉
　学力向上の部分で何かご意見はございませんか。
　そのほか、「開かれた学校づくりの推進」と「教育環境の充実」についてはいかがでしょうか。
　例えば、胆振では登別市が先鞭をつけて実施している土曜授業ですが、推進校については年１０回、その他の小中学校では年４回実施する予定となっております。
　まだ取り組みの途中ですが、土曜日を使って子どもたちの学習機会を増やすという意味では効果が期待できると思っていますし、１１月の土曜授業を全校一斉参観日として公開する予定も組まれております。
　今のところ１１月１日もしくは８日に実施を予定しています。

〈部会員〉
　以前も行っていませんでしたか。

〈部会長〉
　以前は、教育週間として様々なイベントとともに学校公開を行ってきましたが、今年は教育週間の中に土曜授業を組み込んで実施することとしました。
　効果については、各学校の学校評価の中で計っていくことになると思います。

〈部会員〉
　せっかく実施しているのですから効果を計ることは必要だと思います。

〈部会長〉
　幌別中学校は推進校ということもあり、年１０回行う予定で進んでおりまして、ある程度のデータが蓄積されつつありますので、その成果をもとに来年の方向性について検討していくことになると思いますし、全道的にも今後広がっていくものと予想されます。

〈部会員〉
　ゆとり教育の反動ですか。

〈部会長〉
　そうとも言えます。授業時数も増えてしっかりと力をつけることに繋がると思います。

〈部会員〉
　各クラスの授業風景をモニタリングしてＰＴＡの人たちが自由に見ることができるようなシステムはどうでしょうか。

〈部会員〉
　相当な費用がかかると思いますが。

〈部会員〉
　全校ではなく、モデル校１校にのみ入れるとか。

〈事務局〉
　それに限らず、各校の先生方が集まる情報教育推進協議会の中で、いろいろアイデアを出してもらい、ＩＴを活用した教育の可能性について議論を深めてもらうことは大切ではないかと思いますが。

〈部会員〉

昔は、父兄がいつでも授業を参観できたものですが、今はそれができなくなったと聞いていますが。

〈部会長〉
今も基本的には可能です。

〈部会員〉
電子化についてはどの程度進んでいますか。

〈事務局〉
現在、すべての小中学校にパソコン教室があり、小学校では児童２人に１台、中学校では生徒１人に１台の割合で配置しております。
また、各教室にもＬＡＮ配線を引いており、インターネットを活用した授業展開が可能となっていますので、機材や検討項目は別として環境としてはＷＥＢカメラを使用して授業風景などを流したりすることは可能です。

〈部会長〉
ＩＣＴの基盤としては整備されていますが、課題となるのがそれを教える先生にも得手、不得手な人がいるということで、１００パーセント使いこなすのはなかなか難しいですね。
最新の機器も入っておりまして、実物投影機はいろいろな授業で活用されていますし、タブレットについてもこれから各学校に入るようです。

〈市庁内部会部会長〉
実は今回の議会でもタブレットについての質問が出ましたが、まず特別支援学級に導入してどのような効果があるのか見てみようと考えています。導入の時期については未定ですが。

〈部会長〉
函館にある付属の小中学校では、１人１台のタブレットを使っていると聞いています。付属の学校ですから研究のためという目的もあると思いますが、一人一人に持たせることで、壊したりとか無くしたりといった管理上の課題はあるようです。

〈部会員〉
便利なのは分かりますが、リスクの部分と併せて教えていく必要があると思います。

〈部会長〉
すでにパソコンはかなり普及していますので、家庭でもゲーム感覚で使っている子

どもたちが多くなっていると思います。

〈部会員〉
　パソコンの家庭での普及率はどれくらいなんでしょうか。８割程度でしょうか。

〈事務局〉
　約８割という調査結果がありますが、伸び率は頭打ちで最近はスマートフォンなどの携帯情報端末にシフトしているようですので、飽和状態にあると言ってもいいと思います。

〈部会長〉
　今はゲーム機にも通信機能が付いており、ゲーム機でメールのやり取りを行っている子供もいます。

〈部会員〉
　授業の様子の映像をライブラリ化し、インターネットを通じて自宅で見ることができるような仕組みがあれば、自宅での復習で活用できますよね。
塾に行けない子どもや、いろいろなレベルの子どもがいるわけですから。

〈部会長〉
　実際にそういうことを行っている学校もあります。
　子どもたちがタブレットを自宅に持ち帰って、自宅からインターネットでサイトに接続し利用するというものです。

〈市庁内部会部会長〉
　タブレットの利用の方法には２つあるようですね。
　今お話があったような反転授業での使用で、自宅にタブレットを持って帰り予習をし、それをまた学校に持っていくという使い方と、学校に置いて解るまで繰り返し学習するというやり方ですね。

〈部会員〉
　地方都市はいろいろな面でハンデキャップを背負っているので、こういうＩＴを使った学習というのは、格差解消に役立つ手段となると思います。

〈部会員〉
　子どもたちが自分の能力に合わせて学習を進めることができるような仕組について、教育委員会や学校の先生方と、どういう方法が良いのか協議していく必要があると思います。

〈事務局〉
　デジタル教科書の導入は考えていますか。

〈市庁内部会部会長〉
　ハードの台数の問題もありますが、ソフトにもまだ課題があるようで、なかなか良いものが見つからないようです。

〈部会長〉
　室蘭の学校でいくつか試験的にデジタル教科書をやっているところがあるのですが、かなり予算が必要だと聞いています。
　特殊法人から補助があった学校では、教材が潤沢に揃っており授業に活用している例もありますが、やはりデジタル教科書を全体に整備するのは難しいのではないでしょうか。

〈部会員〉
　黒板にチョークで書く時代ではなくなったと感じますね。

〈部会員〉
　教科書も、紙ではなくタブレットになる時代がやって来るのですね。

〈事務局〉
　これに限らずＩＴ化を進める上での最大の課題は予算になりますから、導入が目的にならないよう十分に効果等を見極めてから是非について判断すべきだと思います。
　一旦導入してしまうと数年ごとに更新が発生し、そこでまた膨大な予算が必要となりますから。

〈部会員〉
　学習能力の向上は、体系図ではどの部分になりますか。

〈部会長〉
　２節の「確かな学力の向上」のところになりますが、教育機器の関係は「特色ある教育活動の推進」の④「情報機器の効果的な活用」の部分になります。

〈部会員〉
　教員の働き方についてですが、ストレスを抱えて途中で休職する方も少なくないと聞いています。

子どもたちだけではなく、教える側の余裕というか健康管理も重要だと思うのですが、「教員の資質の向上」については書いているものの、この部分についての記載はないですね。

〈部会長〉
施策の考え方の中に、研修の充実というかたちで書かれています。

〈部会員〉
研修については、民間からの情報を得る場というものも必要ではないかと思いますが、例えば塾の先生とタイアップして行うとか。

〈部会員〉
研修会に出る余裕はあるのですか。

〈部会長〉
全員が年１回以上参加するのが理想ですが、予算の制約等もあり、なかなか難しいというのが現状ですね。
ただ、校内研修というのもありまして、校外研修に行ってきた先生が、他の先生方にフィードバックしていくということは行っています。
先生方の資質向上を図るというという部分では、研修機会の充実というのも重要になってくると思います。
白老と登別が、互いに先進校を視察したりする連携研修も行っています。

〈事務局〉
今回の基本計画作成のポイントでもある、少子高齢化と１０年後ということを考えたときに、教育においては何をしなければならないのか、何が必要なのかということを考えなければならないと思いますが、その切り口で見た場合にこの体系図で足りない部分はないでしょうか。

〈部会長〉
今の部分では、「開かれた学校づくり推進」の「地域・家庭との連携促進」の中で、コミュニティスクールの推進という取り組みを進めています。
学校評議員がコミュニティスクールの中に入っていただいておりますので、今後それをどう整理していくか、コミュニティスクールとしての機能をどう取り入れていくか、ということについては、検討が必要になってくると思います。

〈事務局〉
コミュニティスクールについては、第２期の計画にはなかった新しいものですし、

それは今後も継続して取り組んでいかなければならないもので、１０年間変わることはないと思いますので、この部分は、提言書のキーワードとしてピックアップする必要があると思いますがいかがでしょうか。

〈部会長〉
そう思います。

〈部会員〉
クラスの少人数化が進んできたことは、子どもたちの能力に合わせた授業がしやすくなるということに繋がっていると思いますし、その部分は昔と違って良くなった点だと思いますが。

〈部会長〉
習熟度別の授業とかＴＴの授業については、教員が加配となっていますが、国の施策としては、今の４０人学級を３５人にしようという動きと、習熟度別、ＴＴを増やそうとする動きがあります。
適正な学級規模はどれくらいかという問題については、３５人から４０人程度で、１学年２学級くらいが適正な規模とされています。
１学級だと難しい部分がありますので、２学級にして６年間の間にクラス替えをするという考えで、今は３年生と５年生のときにクラス替えを行っています。
あと、小中一貫校についての国の施策がありまして、今、小中学校は６年と３年になっていますが、これを４・３・２や５・２・２にするなどして９年間の中の区切りを変えようとする考え方で、これから議論になっていくと思います。

〈部会員〉
私は新しい考え方の方がいいと思います。中一プロブレムの問題もありますから。

〈部会員〉
現実には難しいと思いますが、高校に行くときに自動的に振り分けられてしまうということを考えれば、能力別にクラス分けをしたほうが、子どもたちも伸びるのではないかと思います。

〈部会長〉
今のお話のように、子どもたちの特性を活かすという意味で習熟度別の学習が導入されており、理解度に応じた形で、じっくりと基礎を学ぶグループと、応用に進んでいくグループとに分けて指導を行っています。

〈部会員〉

日本の教育にも、もっと多様性を持たせた学習指導があっていいと思いますし、それをもっと広げていくべきだと思います。

〈部会員〉
保護者がどういう教育を望んでいるか、ということについてのアンケート調査をしたことはありますか。

〈市庁内部会部会長〉
やはりベースには学習指導要領というものがありますので、アンケートを取ってもそのとおりにはできないことがほとんどではないでしょうか。

〈部会員〉
ただ、何年かに１回程度はあってもいいのでは、と思いますが。

〈事務局〉
いじめのアンケートというのはありますが。

〈部会員〉
教育だけではなく、そういうものも含めて考えていくことも必要ではないかと思います。

意識アンケートといったものもありまして、学習指導要領の中でどのように学習指導を進めていくかという部分と、保護者や子どもたちが教え方についてどう感じているか、という学習評価の部分の参考にしています。

〈部会員〉
アンケートは、単に保護者の意見を聞くだけではなく、学校からの情報発信にも利用できるのではないでしょうか。
例えば、今学校では習熟度別の学習指導を行っていますが、これについて何かご意見はありますか、というような聞き方にすれば、学校ではこういうことをやっている、という情報発信にもなりますし、一方でそれに対する意見ももらえますよね。
一方通行ではなくなると思うのですが。

〈部会長〉
保護者からは、習熟度別の学習指導や、ＴＴが付いてきめ細かく指導していく取組などに対し高い評価をいただいております。

〈部会員〉

体験学習などでは面白いアイデアがもらえるかもしれませんね。

〈部会員〉
ＴＴの効果は大きいですか。

〈部会長〉
理解の遅れている子どもには、ＴＴが付いて指導できますので効果が大きいと思いますし、一斉指導では目の届きにくい部分にも対応できます。
進め方としては、クラスを２つに分け、それぞれに先生が１人ずつ付く場合と、ひとりが授業を進めながらＴＴが補助にまわる場合とがあります。

〈事務局〉
そのあたりの予算を道教委がもっと手厚く配分してくれるとありがたいのですが、習熟度別などの職員加配の部分については成果が求められるものとなっています。

〈部会員〉
登別市のＴＴの配置はどうなっていますか。

〈部会長〉
１校を除いて、全小中学校にＴＴが配置されています。
中学校は教科担任制なので少し違いますが、小学校では２名配置されている学校もあります。

〈部会員〉
そこが充実しているとかなり違いますよね。

〈部会長〉
大変効果が大きいですね。

〈事務局〉
コミュニティスクールについて少しお聞きしたいのですが、庁内の検討部会でも同じ資料を使って検討を進めていますが、これについて市民部会では、体系図のどの部分にコミュニティスクールを追加するとか、変更するなどの検討については、どの程度進められているのでしょうか。

〈市庁内部会副部会長〉
庁内部会の中では、２「開かれた学校づくりの推進」の④「学校評議員、学校評価

の活用促進」の部分をコミュニティスクールとして整理し、②「地域・家庭との連携促進」の括りの中に組み込んでいこう、という方向で話が進んでいます。

〈部会員〉
②「地域・家庭との連携促進」と④「学校評議員、学校評価の活用促進」を統合するイメージですね。

〈市庁内部会副部会長〉
そうです。
コミュニティスクールの活用や学校評価などの文言を入れ、文案を作成しているところです。

〈事務局〉
学校運営協議会制度という言葉でコミュニティスクールのことに触れています。

〈部会員〉
学校評議員は以前からいませんでしたか。

〈部会長〉
これまでは、学校評議員会の中で評議員が、学校運営についての意見を述べていましたが、そこに学校支援地域本部事業の機能も取り入れて、学校・地域・家庭が一体となった学校づくりを、コミュニティスクールとして全校で進めているところです。
そのコミュニティスクールのための話し合いの場が、学校運営協議会となります。

〈事務局〉
コミュニティスクールについては、市民の方から意見として出されていますし、庁内部会でもテーマとして上がっている部分なので、体系図には盛り込まれることになると思います。

〈部会長〉
３「教育環境の充実」の部分にある児童生徒の安全性の確保についても、地域の方にご協力をいただいておりますし、将来的には地域と連携した防災訓練なども実施できるよう企画できればと思っています。

〈部会員〉
不審者の通報が入ったりすることはありますか。

〈市庁内部会副部会長〉
けっこう入ってきますね。

〈部会員〉
子どもに声をかけると、不審者と間違われて通報されたりする笑えないケースも多いと聞いていますが。

〈部会長〉
子供たちの安全確保のため、名札も下校時には外すよう指導をしています。
付けたままだと本人特定されてしまう可能性がありますので。

〈事務局〉
登別の学校では、全校でそういう対応をしているのですか。

〈部会長〉
そのようになっています。
地域で子どもたちを見守るという視点でもコミュニティスクールは機能していると思います。
例えば、秋田県などでは３世帯の家族構成も珍しくなく、おじいちゃん・おばあちゃんも含めた家族で子どもを見守る、という地域の仕組みができ上がっています。
そういう地域から見ると、北海道では少しずつ核家族化が進んでいるように思えますし、共働きの中で、家族が子どもたちを見守ることが難しくなっていると思います。
そういうことを、学校も参画してコミュニティスクールの中で行うことができればいいと思います。

〈事務局〉
登別のコミュニティスクールは、国の事業を受けた道教委の委託事業ではないので、その制約にとらわれない自由度を持った独自のものと言えます。

〈部会員〉
それは、特色ある学校づくりになると思いますし、登別版コミュニティスクールとして、もっと積極的にアピールすべきではないかと思いますが。

〈部会員〉
教育は、何か一つを向上させればそれで良いということはなく、他の部分にも連動しているものなので、全体として教育というものを考えていく必要があると思います。
２「開かれた学校づくりの推進」の③「地域の教育力の活用」の中で、外部人材と

して図書ボランティアなどの活用を促進するとありますが、ここは学校司書の配置と併せて充実を図るべきだと思います。
　配置された学校司書については、資料からも良い結果が出ていますので、さらに配置を進めてほしいと思います。

〈部会員〉
　コミュニティスクールは、どういう人たちで議論されているのでしょうか。

〈部会長〉
　コミュニティスクールの推進にあたっては、各学校ごとに学校運営協議会が組織されており、そのメンバーは、これまでの学校評議員に加えて、町内会や民生委員など地域の役員の皆さんと、先生方、学校支援地域本部事業の方などです。
　地域の情報や意見などをメンバーの方々からいただいて、学校運営に取り込んでいけるような体制を作っています。
　まだ始まったばかりなので、これまで行ってきた事業をどのように整理し、発展させていくか、ということが今後の課題ですね。

〈部会員〉
　この体系図の「開かれた学校づくりの推進」の話を聞いていて感じたのですが、先生方が忙しい中で、コミュニティスクールにまた先生が入って議論するとなれば、疲弊してしまうのではないかと思います。
　今後、土曜授業を推進していく中で、学習の進め方などの議論についても、メンバー以外の地域の方が参画できれば、より幅の広い議論が可能となりますし、登別版のコミュニティスクールとして、より発展することができると思います。

〈部会長〉
　まずは、地域の方にボランティアとして学校に入っていただける体制作りを進めておりまして、放課後学習塾のような形で地域の方にご協力をいただいております。
　このような取組をきっかけに、より幅広い地域の方が参画できるような体制をコミュニティスクールの中で作っていけたらと思っています。
　そろそろ時間も近づいてきましたので、次の日程を決めたいと思いますがよろしいですか。

〈事務局〉
　次回ですが、Ⅲ「青少年が健やかに地域で育つ環境づくり」からとなりますが、振り返りの意味も兼ねて、この部分についてもう少し触れたほうがいいですか。

〈部会長〉

そうですね。

〈事務局〉

では、次回は１０月７日の火曜日と１０月２０日の木曜日、時間はいずれも１７時３０分からで、場所は第１委員会室を予定しておりますのでよろしくお願いいたします。

それと今後の流れについてですが、年内を目途にこの体系図についての検討と振り返りを終わらせて、翌年２月末までに育み部会としての提言書を事務局の方でまとめる、というスケジュールで進んでいきたいと考えておりますのでよろしくお願いいたします。

今後を考えると、キーワードとなるポイントを会議の中でピックアップしていくやり方が効率的だと思いますので、次回からはそのように進めていきたいと思います。よろしくお願いいたします。